

豚繁殖・呼吸障害症候群被害農場における農場主の行動変容と支援体制構築の一事例

茨城県県西家畜保健衛生所

○佐藤朝咲 赤上正貴

豚繁殖・呼吸障害症候群（以下、PRRS）は慢性化しやすく、生産性の低減のみならず農場主の精神的負担も大きい重要な伝染性疾病。令和4年3月、母豚300頭規模のA養豚場でPRRSのクラスターIV株が侵入したが「母豚が一度感染すれば落ち着く」との認識のもと十分な対策を講じず。令和4年9月以降、子豚舎で毎月約100頭の離乳豚が死亡し「何をすればよいか分からない」状態が精神的に最も辛かったと農場主は振り返る。当初は飼料会社の獣医師に指導を受けていたが、飼料会社変更によりその支援が途切れ、母豚の減頭を開始するなど廃業も視野。令和5年5月、当所に相談があり、共に過去の検査結果の整理やPRRS対策の検討を行う中で、農場主は試行錯誤を重ねながら分娩舎の区画化や動線管理の見直しなどバイオセキュリティ対策を段階的に導入。令和5年12月には垂直感染が疑われ子豚の死亡頭数が増加したものの、分娩舎の子豚を運ぶ台車を介したウイルスの持ち帰りを疑い台車の動線を遮断するなど、冷静に原因を分析し対処。令和6年以降、分娩舎の部分的オールアウト体制の確立と導入豚検査の実施により飼養豚の死亡率が安定。農場主は「最も重要なのはバイオセキュリティを自農場にどう落とし込むかだ」と強調した。本事例は、農場主の主体的な行動変容と継続的な支援体制が慢性疾病対策の構築に重要であることを示唆。